

日本医療薬学会第 51 回公開シンポジウム開催報告

実行委員長 獨協医科大学病院薬剤部 越川千秋

平成 25 年 11 月 17 日（日）に、宇都宮東武ホテルグランデにおいて日本医療薬学会第 51 回公開シンポジウムを開催いたしました。栃木県では初めての開催でしたが参加者は県外からも来ていただいて 175 名でした。

今年は栃木県において平成 20 年に策定された「栃木県がん対策推進計画（1 期計画）」が終了し、第 2 期計画として「栃木県がん対策推進計画（2 期計画）」がスタートした年にあたります。第 1 期計画ではがん連携拠点病院の整備等によるがん医療の均てん化の促進などが図られました。一方、小児がん対策や子供の頃からのがん教育、がん患者の就労を含めた社会的な問題等の新たな課題も明らかになってきたとの報告もされました。第 2 期計画では今後 5 年間の県のがん対策の基本的な方向性等を明確にするとともに、新たな課題にも対応するため策定されました。

本シンポジウムではこのような栃木県のがん対策の計画に合わせて、テーマを「がん専門薬剤師制度の普及啓発並びに専門薬剤師の養成—がん患者・家族と向き合える薬剤師を目指して—」としました。特別講演 2 題と日頃がん医療に携わっている 5 名の専門家によるシンポジウムを用意しました。

特別講演 1 では、栃木県立がんセンター所長の清水秀昭先生に「がん患者・家族と向き合える薬剤師」と題して栃木県としてのがん対策への取り組みの紹介に続き『全ての医療従事者が「人との対話」を大切にする社会の構築』を願うとのお話をいただきました。特別講演 2 では自治医科大学附属病院緩和ケア科准教授の岡島美朗先生に「がん患者・家族に対する精神的ケア」と題して、「がんは生命を脅かす疾患の代表格であり、がんに罹患することは患者に大きな心理的衝撃をもたらす。また、近年がん治療の進歩は著しく、生命予後にも格段の改善が認められているが、その反面、治療の負担や後遺症が患者の大きな負担になることも少なくない。こうした事情から、がん患者の精神的ケアは QOL を保つだけでなく、がん治療が速やかに進行するためにも必須のものとなりつつある」とお話しいただきました。

シンポジウムでは「チーム医療における緩和ケアを考える」をテーマに在宅療養支援医師の立場から村井クリニック院長の村井邦彦先生に、病院緩和ケア医師の立場から獨協医科大学病院緩和ケア部門長の石川和由先生に、病院緩和ケア看護師の立場から獨協医科大学病院緩和ケア認定看護師の渡辺佳世子先生に、在宅療養支援薬剤師の立場からハーモニー薬局の上田幸生先生に、病院緩和ケア薬剤師の立場から自治医科大学附属病院がん専門薬剤師の奥田泰考先生に、それぞれの立場からご講演をいただき緩和ケアに薬剤師がどのようにかか

わっていけばよいのかについて考えました。

最後に、このシンポジウムを開催するにあたり、講演を快くお引き受けいただいた演者の先生方、後援いただいた栃木県薬剤師会並びに国際医療福祉大学薬学部そして準備の段階から長期にわたりご苦勞いただいた栃木県病院薬剤師会の関係各位に心より感謝申し上げます。